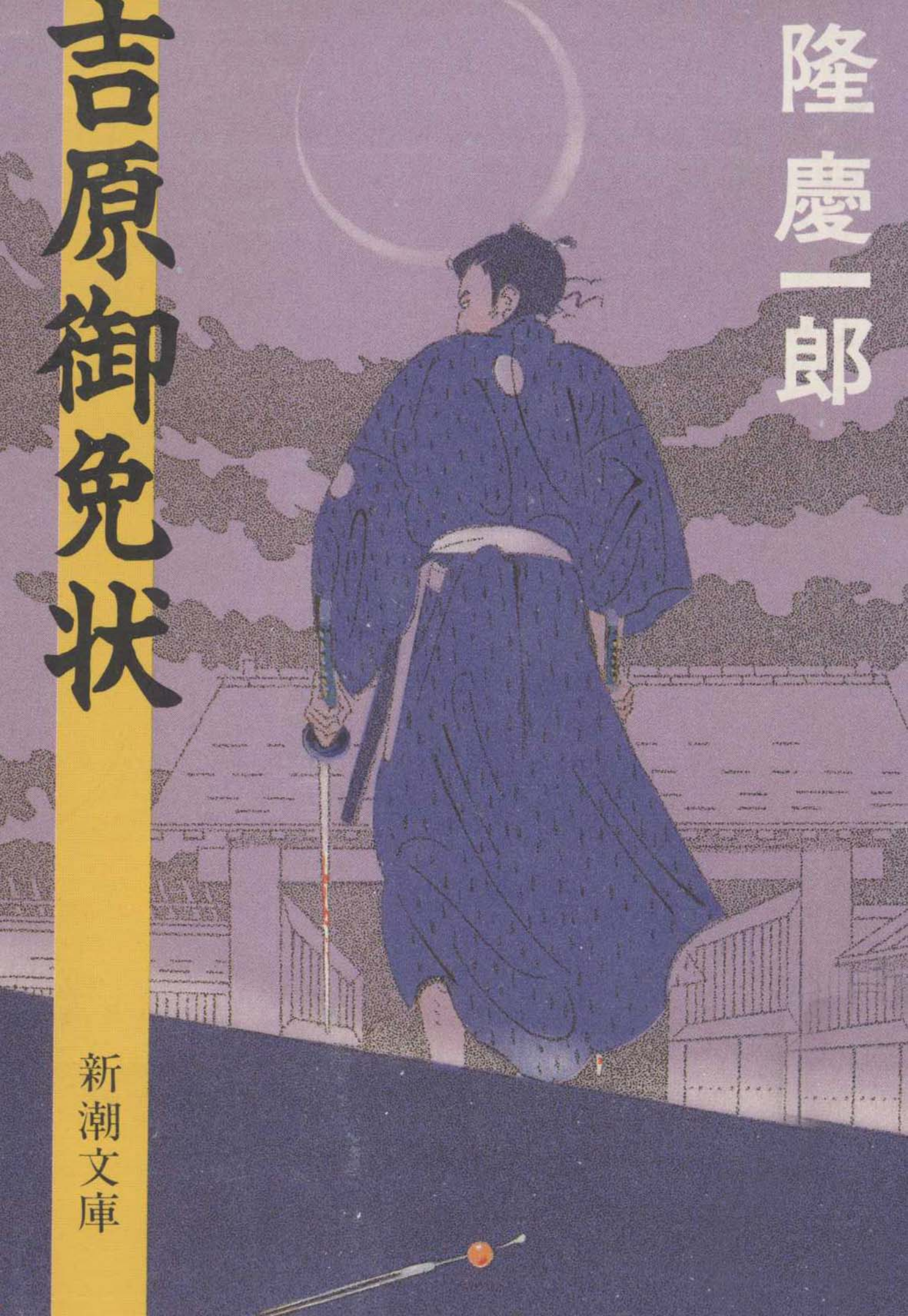
吉原御免状

隆慶一郎

新潮文庫



吉原御免状

新潮文庫　り－2－1

平成元年九月二十五日　発行
平成七年八月二十日　二十一刷

著者　隆慶一郎
発行者　佐藤亮一
発行所　株式会社　新潮社
郵便番号　一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話　編集部(〇三)三二六六—五四四〇
読者係(〇三)三二六六—五一一一
振替　〇〇一四〇—五—八〇八
価格はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社読者係宛ご送付ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

印刷・大日本印刷株式会社　製本・加藤製本株式会社
© Jun Ikeda 1986　Printed in Japan

ISBN4-10-117411-3 C0193

新潮文庫

吉原御免状

隆慶一郎著

新潮社版

吉原御免状

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

妻

順に

日本堤

松永誠一郎が、浅草日本堤の上に立ったのは、明暦三年（一六五七）、旧暦八月十四日の夕刻である。

かすかに風が鳴っていた。見渡すかぎりの田圃に、刈り残された稲葉がふるえている。まったくの田舎景色である。誠一郎は、ほっとした。

前夜の泊りである川崎の宿を、朝方たち、殆んどやすみなしで、江戸の町を横切って来たのだが、誠一郎は、この生れて初めて見る町が、どうにも好きになれなかった。

（江戸なんて、こんなものか）

喧騒と雑踏。罵り合うような職人たちの会話。かん高い売り声を張り上げる行商人たち。漠然とした殺気。とげとげしい視線。そのすべてが、誠一郎の気分を沈ませるのである。

（山の生きものたちの方が、ずっと、静穏で、気品がある）

真実、そう思う。

誠一郎は、二十五の齢まで、肥後の山中で生きて来た。そこでは、けものたちは、互いに相手の領分を犯すことなく、穏やかに、誇り高く、暮している。無用な殺気も、とげとげしい視線も、感じたことがない。

（どうして先生は、こんな猥雑な町へ行けと、遺言を残されたのか）

誠一郎の師は、宮本武蔵政名である。誠一郎は、棄て子。ものごころつく頃から、肥後の山中で武蔵に育てられた。師であると同時に父であった。武蔵は、今から十二年前、正保二年に、世を去ったが、死の床に高弟の肥後藩士、寺尾孫之丞を呼び、誠一郎を託した。

「二十五才まで山を出すな。二十六才になったら、江戸にゆき、吉原に庄司甚右衛門を訪ねさせよ」

庄司甚右衛門あての添書まで渡して、そういった。当時、十四才だった誠一郎は、その時の武蔵の懐しそうな顔を、はっきりと憶えている。

「刀法指南、一切無用」

武蔵は、寺尾孫之丞にそうもいった。だから孫之丞は、一度も稽古をつけてはくれなかった。誠一郎は、武蔵によって十四才までに叩きこまれた刀法を、たった一人で完成してゆくしかなかった。

目の前には、いつも武蔵がいた。その大きな身体で立ちはだかり、鷲のような眼で誠一郎を見据えていた。斬っても斬っても、武蔵は、いた。呆れるほどの執拗さであり、大きさだった。その武蔵の姿が、去年の冬、ふっと消えたのである。決してはなれることのなかった武蔵の眼が、気がついた時には、もう、なくなっていた。誠一郎は、己が刀法に自在を得た。

それを待っていたかのように、寺尾孫之丞が訪れ、山を降りる日が来たことを告げたのである。それから半年ほど世間のしきたりについて教えこまれた揚句の旅立ちだった。

（いっそ、二十六になんか、ならなければよかったのに……）

われながら、だだっ子めいた思念が心を掠め、誠一郎は苦笑した。

鋭い鳥の声に、誠一郎は、われに返った。

（杜鵑じゃないか）

不吉、という感覚が、不意に襲った。山で育った誠一郎は、こうした感覚に鋭い。一種の予知能力である。ゆっくりと息を吐き出しながら、肩から爪先まで、意識して力を抜いていった。危険に対応する構えだった。そのまま、チラチラ明りのつきはじめた人家の方へ、歩きだす。そのよろめくような、頼りなげな歩き方が、『咒師走り』に現れる『禹歩』の型であることを、誠一郎は知らない。『咒師走り』は、昭和の今日でも、東大寺二月堂のお水取りに行われているもので、古く中国の遁甲兵術から来ている。遁甲、即ち忍術である。誠一郎は、全く無意識に、忍びの術を使っていたことになる。

ちなみに謂う。謡曲の『弱法師』は、四天王寺の遊僧である。遊僧とは、寺院に属し、僧形をした、咒師のことだ。『禹歩』の歩き方が、よろよろと、よろめいているかのように見えるので、咒師、即ち遊僧を、弱法師といったのである。誠一郎の歩みは、その弱法師に、よく似ていた。

誠一郎は知らなかったが、この明暦三年八月十四日という日は、吉原にとって劃期的な日

だった。新吉原が誕生し、その営業の初日だったのである。

元々、庄司甚右衛門が開いた吉原は、日本橋葺屋町にあった。現在の日本橋堀留町一丁目のあたりである。それが、四十余年を経た明暦二年、つまり去年の十月九日、突然、町奉行所から、所替えの命令が出た。代替地は、本所か浅草日本堤か、好きな方をとれと云う。本所は隅田川の向うである。当時、隅田川には、橋が一つもなかった。吉原町の年寄たちは、鳩首協議の結果、田圃の中とはいえ、浅草日本堤を選んだ。

北町奉行、石谷将監は、これに対して五つの特典を吉原に与えている。

一、現在の二町四方の土地のかわりに、五割増の、二町に三町の場所を下付する。

一、寛永十七年以来禁制になっていた夜の商いを、十五年ぶりに免許する。

（この十五年間、吉原は、昼遊びだけだった。当時の武士は、よほどの用のない限り、夜、屋敷を出ることを許されていない。この禁制は、初期吉原の遊客が、武士を主体としたことを示している）

一、江戸町中に二百余軒ある風呂屋を取潰す。

（この風呂屋とは、勿論、湯女を置き、売色を業とした風呂屋である。様々な掟にしばられ、莫大な金のかかる吉原に較べて、安直に目的を達することの出来る風呂屋は大好評で、吉原の営業をおびやかす存在だった）

一、山王、神田両祭礼、及び、出火の時の跡火消の町役を免除する。

一、引越料として、一万五百両、下さる。

（これは、間口一間につき十四両の割合で計算した金額である。但し、吉原の一間は京間である。江戸の町家は、徳川氏の定めた、六尺＝一間の田舎間で建てられたが、吉原だけは、豊臣秀吉が文禄の検地に用いた、六尺三寸＝一間の、京間を使っている。吉原が、京島原を真似てつくられたことの、一つの証拠である）

吉原は、この金を、明暦二年十一月二十七日に受取っている。来春から日本堤の普請に取り掛る、という約束だったが、明けて明暦三年正月十八日、猛火が江戸を襲った。後世にいう、明暦の大火、又の名、振袖火事である。

正月十八日の昼すぎ、本郷丸山本妙寺から発したと伝えられる火は、翌十九日も燃え続き、二十日朝に至って、ようやく鎮まった。江戸の町は焦土と化し、焼死した人の数は、三万五千人といい、十万人ともいう。実数五、六万が、確実に、焼死、又は凍死したのである。火事で凍死とは奇妙にきこえるが、火の鎮まった二十日の夜半から大雪が降り積り、煖をとるすべもない多くの庶民が、事実、凍え死んだ。

人ども死すべき時の定まりけん。火をのがれては水におぼれ、飢ゑて死に、凍りて死す。いづれ命は助からず、むざんといふもおろかなり。

浅井了意の『むさしあぶみ』は、そう書いている。惨状、思うべしである。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

吉原も勿論、全焼。暫く現地の仮宅で営業していたが、六月十五、十六両日をかけて、すべての遊女を屋形舟に乗せ、浅草日本堤に移った。ここでも、山谷辺の百姓家を借りて、仮宅営業を続けながら普請にかかり、七月中に落成。八月十日に移転を完了し、この八月十四日をもって、新吉原の本格的営業を開始した（この移転以前を元吉原、以後を新吉原と呼ぶ）。新生吉原の、記念すべき初日だった。当然、廓の者も、日本堤の中宿、腰掛茶屋の者たちも、張り切って初日の客を待っていた。

弱法師の歩みを運ぶ誠一郎が、彼等の目に、心ここにない遊士の一人と映らないわけがなかった。

「もうし、お武家さま」

堤の中ほどまで来た時、声がかかった。新築の茶屋の前に、男が一人、愛想笑いを浮べながら、もみ手をしている。この茶屋は、後に『どろ町の中宿』として栄えた、吉原への中継所である。このあたりの町名は田町だが、それを『どろ町』というのは、この中宿で、盥に水を張り、吉原通いの遊客に足を洗わせたからだ。

「そりゃいけやせんよ、ああた」

なれなれしく、すりよりながら、男は云った。

「はやるお気持はね、ようく分ってるン。けどね、そのおみ足で、丁へ入っちゃ、ああた、おいらんは、これでさァ、これ」

男は、ぷい、と横を向いてみせた。
誠一郎には、男の喋っていることが半分も分っていない。何がはやるお気持なのか。丁とか、おいらんという言葉も不明である。分ったことは、ただ一つ、自分の足が泥だらけだということだった。確かに初めて会う人の前に出るには、非礼にすぎるかもしれない。
「ありがとう。足を洗って行きます」
誠一郎は、軽く一礼して、山谷堀へ降りてゆこうとした。
「ちょ、ちょっと、ああた」
男は、慌てたらしく、口ごもった。
「うちで、すすぎを、おとりなさいまし。おぐしの方も、そのまんまじゃ、あんまりでげしょう。ちょっと、香りのある油でもおつけになりゃア、おもてなさいますよ、おいらんに」
誠一郎は、首をかしげた。おいらん、という言葉は二度目である。
「おいらん、って、なんですか」
「へっ？」
男は、どぎもを抜かれたような、かん高い声をあげた。だが、すぐに笑いだして、
「へっへっへ。おひとの悪い……」
「本当に、なんなんですか」
誠一郎は、真顔である。
「ああた、丁へおでかけじゃ、ないんで」

「丁って？」
「悪い冗談だ」
男は手をふってみせた。
「丁は丁でさァ。吉原五丁町のこって……」
「ああ。それなら、確かに私の行先です」
「丁へゆくのに、おいらんをご存知ない？」
男は、からかわれたと思ったらしい。むっ、とした表情になった。
「私は、おいらんという人に会いにゆくんじゃないんです。庄司甚右衛門という方に用があるだけで……」
不意に、空気が凍りついた。このおかしげな男の体内から、思いもかけぬ凄まじい殺気が、放射されたのである。誠一郎は、僅かに眼をそらせることで、その殺気をやりすごした。殺気は、一瞬に消えた。誠一郎でなかったら、恐らく、感知出来なかったと思われるほど、瞬息のものだった。
「庄司さまのお店なら、江戸町一丁目の角でございますよ。西田屋といわれましてね」
男はひどく丁寧に、そう云った。

みせすががき

山谷堀の冷い水で、顔を洗い、足を洗い、衣服に滲みこんだ道中の土埃を払いながら、誠一郎は当惑していた。八方から殺気がとんで来る。それも、江戸の町中で感じられた、漠然たる殺気ではない。確たる目標を持った、刺すような殺気である。目標は誠一郎だ。だが誠一郎には、なんの覚えもない。

（何故だ。何がいけなかったんだ）

自分が口にしたことは、吉原五丁町が行先であること。庄司甚右衛門に用があること。その二つだけだ。庄司甚右衛門？　その名前が、これほどの殺気を呼びおこしたのだろうか。庄司甚右衛門は、多くの男たちの怨みを買っているのか。そうは思えなかった。西田屋を教えてくれた男の、うやうやしいといえるほど、丁重な言葉づかいを、誠一郎は思い出している。

（分らない）

誠一郎は、首を振り、夥しい殺気と視線を背にうけながら、土堤を進んだ。相変らず弱法師の歩みである。

背後に、馬蹄の音をきいた。馬子にくつわをとられた見事な白馬が、誠一郎を追い抜いてゆく。馬上には、鼻の大きな、壮年の武士。大身の旗本か、大大名の江戸留守居役か、立派な身ごしらえである。

ピュッ。

追い抜きざまに、その武士が、馬上から抜討った。殺気はない。乱暴な話だが、これはた

だの冗談なのである。誠一郎は、眉も動かさなかった。武蔵直伝の『五分の見切り』で、太刀先の僅かに届かないことを見抜いていたからである。武士は、寛闊に高笑いすると、広い坂道を降りていった。この道を五十間道といい、三曲りに曲っている。最初の下り坂を衣紋坂といい、坂の上右手、石垣の台上に、屋根つきの高札場があり、反対側の左手には、柳の樹が植えられてあった。所謂『見返り柳』である。

誠一郎は、衣紋坂を降りながら、初めて吉原を望見した。恰度、灯の入ったところだった。土堤の暗さにひきかえて、眩しいばかりの明るさである。誠一郎は、足をとめていた。夜の中のこれほどの華やぎを、誠一郎は生れて初めて見た。

（これは、なんだ）

当惑に似ていた。なによりも、戸まどいが先に来た。やがて、それが驚嘆に変った。

（これこそ、都というものではないか）

誠一郎は、動けなかった。すくんだように、この光の洪水を見つめて、立ちつくしていた。

不意に、三味線の音が湧き上った。それも、一挺や二挺ではない。ゆうに百挺をこえる三味線が、一斉に、同じ音色を奏でではじめたのである。唄もまじっていたが、誠一郎には、詞が分らない。

だが……、

（嗚呼！）

誠一郎は、呻いた。胸が騒ぐ。なんともやるせなく、胸が騒ぐ。肥後山中の早春の日々に、

こんな風にわけもなく胸が騒ぐことが、何度かあった。身も心も、虚空の中を、果てしなく漂ってゆくような思い。誠一郎の頬が、いつか濡れている。

（俺は、なぜ、泣いているんだろう）

どこまでも軽く、心を浮きたたせる音色の底に、そこはかとない悲しみの色がある。それが、誠一郎を泣かせるのである。

（俺は、今日まで、何をして来たのか）

三味線は、所謂『みせすががき』であり、吉原の夜の世界の開幕を告げるものだった。清掻の清は、素謡の素で、掻は、古くは琵琶を掻き鳴らすことだったが、後には唄を唱わずに、絃楽器のみを奏するのを、すべて、すががき、という。夕刻、遊女たちの身支度が終ると、店の者が神棚に拍手をうち、縁起棚の鈴をならす。それをきっかけに、新造が、三味線をもって神前に並び、弾きはじめる。この三味線の中を、遊女は二階から降りて来て、見世に並ぶ。これが張り見世である。後世、吉原芸者が現れると、彼女たちが、この清掻を弾くことになる。清掻は、営業が終るまで、つまり引け四つ（夜十二時）まで、間断なく弾かれていた。

その『みせすががき』が、松永誠一郎の人生を大きく変えることになる。

瓦をのせた、大名屋敷のような黒塗りの門（大門）をくぐると、目と鼻の先の右角に、西田屋があった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com